



**資格が取れたら
正社員にしてください！**

周囲に「無理じゃないのか」と言われた
脳性まひの男性は、それでも「なにくそ」の気持ちで、
一人前のボイラー技士を目指した。

そのがんばりは、熟練のボイラー技士をうならせ、
一級ボイラー技士の資格試験にも一発で合格。
いま、独り立ちの技術者としての道を歩んでいる。

編集部=文
text by KOTONONE
岸本 剛=写真
photograph by Tsuyoshi Kishimoto

ボイラー技士の星

シリーズ 障害者の就労事例 18

KOTONONE
Series of Stories
vol.18

宮越崇行さん（北海道健誠社）

**設立当初から
障害者雇用**

北海道旭川地域を中心に、全道で
リネンクリーニング業を展開する「株
式会社北海道健誠社」。本社に働く
約二七〇名の従業員のうち約四割が
障害者。また関連する「NPO法人ま
こと」にも就労継続支援B型事業所
として、およそ二〇名の障害者が働い
ている。

北海道健誠社は設立当初から、
「障害者との共生」を理念に掲げ、障
害者の雇用を積極的に行っている。
瀧野喜市社長が五三歳で設立した
当初は数名だった障害者の雇用数も
年々増やし、いまの人数にまで広げた。
北海道健誠社が「バイオマス事業」に
取り組むようになったのは、一〇年前
のこと。洗濯や乾燥などで常に大量の
燃料を必要とするクリーニング工場。
それまで使っていた石油から、木質バイ
オマスへの転換を決めた。廃材や間伐
材をチップにして、それを燃料として
活用する木質バイオマスは循環型のエ
ネルギーであり、二酸化炭素の排出を
抑えるなど環境負荷を低減する。ま

た、運用の仕方によってはコスト削減の
効果もある。

その木質バイオマスのボイラーを動か
している技士の一人が障害者だった。

**ボイラーも
ブルドーザーも動かせる**

クリーニング工場の隣にあるボイ
ラー棟を訪ねると、ブルドーザーで大
量のチップを一カ所に寄せ集める作業
が行われていた。ブルドーザーを操作
しているのが、そのボイラー技士・宮越
崇行さんだと聞いて、びっくり。ボイ
ラーだけでなく、こんな大きなブルド
ーザーも動かすとは。運転席から降りて
きた宮越さんは、精悍な顔つき、身体
つきで、いかにも「現場の人」という風
情。聞くと脳性まひで、生まれつき手
足の動きや発語に障害があるという。
確かに歩く姿を見ると、障害があ
るということはわかるが、ブルドーザー
を動かし、重い資材が載った台車を押
し、また汗をかきながら燃えさかる炉
の様子を見つめる姿は、まさに「職人」。
まぎれもなくボイラー技士だ。

宮越さんは、ブルドーザーの運転技
術を生かし、大雪の日には、駐車場の